生くつ

片野愛子遺歌集

生くる

実生短歌会刊

歌集　生くる

昭和四十五年三月二十日印刷
昭和四十五年四月十五日発行

定価　一〇〇〇円

著者　片野愛子

発行者　貝瀬正勝
東京都八王子市長房町一五八四

発行所　実生短歌会
東京都世田谷区桜上水一丁目一番九の二〇六

印刷所　東亜印刷株式会社

製本所　中沢製本所

まえがき

片野愛子さんのことを思うと、なぜか万葉の女性歌人たちのことが心に浮かぶ。彼女と万葉集と、それほど深いかかわりがあったとは思えず、万葉の女性歌人たちのような熱烈な相聞歌を多く詠んだわけでもないのに、そこに共通する何かがあったように思えてならない。私はそれを「ますらをぶり」と呼びたい。

常識的なことだが、万葉の歌を平安以後の歌とわかつ大きな特色の一つは「ますらをぶり」である。生身の片野さんは、病弱でなよなよとした、文字通りの「手弱女（たをやめ）」であった。ただその手弱女ぶりは、表面上の弱々しさとは裏腹に、内部に強烈な個性を蔵し、それを短歌の上にはばからず表現したという点で、額田女王や狭野弟上娘子などと、相通ずるものがあった。

「をだまき」同人であったころ、私は片野さんの歌をみて、科学者の観察眼

と画家の色彩感覚を兼ねそなえた人のようだと評したことがある。これには、若い人を励ますための誇張があったとはいえ、本質的には誤っていなかったと思う。「をだまき」時代の彼女については、作品を通して以外には知るところがなかったが、彼女が「実生」同人になって間もなくのころ、鵠沼の福沢準一氏宅で月例の会があって、藤が谷でバスをおりると、続いておりた女性を見て、私は即座に片野さんだなと思った。あいさつすると、はたしてそうであった。格別に彼女のことを考えていたわけでもないのに、即座にそれとわかったというのは、その強烈な個性のゆえにほかならなかったと、私は思い当たるのである。

交際がやや深くなるにつれて、彼女がその作品から想像していた通りの人であることがわかって来た。短い期間の交際だったにもかかわらず彼女についての思い出は、まことに豊かである。書くことはいくらでもあるが、いまは具体的なことにふれている余裕がない。生前の彼女をご存じない方々も、この歌集を読んで感じられる通りの女性を想像していただけばよい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼女の歌についても、私が蛇足を加える必要はすこしもない。彼女は三十五歳という若さでたおれた。ずっと生きていたら、勉強家の彼女のことだから、作品はさらに磨かれ、成長したであろうが、ここに集められた歌からでも、短歌史上に残る女性たちと肩を並べるに足る素質を、十分にうかがうことが出来るであろう。

ただ一つ、ぜひとも知っていただきたいことは、彼女がその短い生涯の最も重要な期間を、いかに酷薄な戦いに終始したかという事実である。彼女は二度の結婚生活を持ったが、最初の結婚生活は、未熟で無理解な環境との戦いであり、そのために以後の生涯に苦闘をしいた病を得たようである。この病との戦いがいかに酷烈をきわめたかは、おそらく他人にはうかがい知ることが出来ないであろうが、そのわずかな休戦のひまに、彼女は第二の結婚生活に入り、一児の母となった。彼女にとって、この束の間の歓びが、死に到る病への転機となったのである。

あるいは結婚しなかったら、母とならなかったら、彼女はもっと長く生きら

れたであろうというのは、第三者の無責任な痴言に過ぎまい。それはもはや彼女の宿命であった。彼女自身、そのために残りの生命を燃焼し尽くしたことを、いささかも悔やんではいなかったであろう。いくたびか傷つき倒れながら、不死鳥のように立ち上がって来る彼女の生命力に、私は当時畏敬の念を抱いたものである。

しかし、彼女はついにたおれた、肉体の弱さを魂の強さでささえていた生命力にも、尽きる時が来たのである。私は彼女の死顔を見ることはできなかったが、おそらく会心の戦いにたおれた勇者のように、安らかなものであったと思う。この歌集は、彼女の壮烈な戦いの記録として、夫君貝瀬正勝君の手によって編集されたものである。

昭和四十五年一月

川上　巌

目次

まえがき……川上　巌
昭和二十四年……11
昭和二十五年……15
昭和二十六年……21
昭和二十七年……25
昭和二十八年……29
昭和二十九年……33

昭和三十年……39
昭和三十一年……45
昭和三十二年……53
昭和三十三年……59
昭和三十四年……71
昭和三十五年……85
昭和三十六年……101
昭和三十七年……117
氷河期の骨、谷と鳥と、花の坂、丹生の石器、かなしみ、水辺、虫の頃、
秩父路、ミチオシエ
昭和三十八年……143

いたみ、野路、隣人、谿、野と地階と、屋上にて、山道、同窓会にて、
鄙の家、いたく真面目に
昭和三十九年……169
生くるⅠ
昭和四十年……183
生くるⅡ
昭和四十一年……193
生くるⅢ
昭和四十二年……207
生くるⅣ
あとがき……211

題簽　片野亀久女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

生

く

る

昭和二十四年

峠一つ越え来て母とつくしつむ土手にかがよふ夕近き光

米洗ふ白きにごりは裏庭の三つ葉の下(もと)に流れ行きけり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c